



死神堂書店

嵐淳

私は休日の午後、わりかし天気良く、春が近づきつつある暖かさがあるので、久しぶりに電器店街にでも行こうかと自宅を出て、駅へと向かった。

周りはいかかわらずのかわりばえのしない住宅街である。葉のない街路樹もさびしげにたたずんでいる。

ふと横の道に入ったら駅への近道ではないかと入ってみた。

とっていたら、通りに面したところに見たことない店があった。

古びた建物の看板には、かすれた文字で『市仁上堂書店』とあった。

いかにも昔からここにあったかのような風情だが、まったく見覚えがなかった。この道はこれまで何百回いや何千回以上通ったはずなのだが。では、ここにはまえに何があったのかということ思い出すことはできない。となると、見過ごしていたのかという気にもなる。

外からガラス戸の中を見ることが出来た。いかにも古そうな本ばかりに見えるので古本屋のようである。

私は本を読むのが好きで、よく古本屋に行き行って買い物をする。この書店にも掘り出し物があるかもしれないと思い、戸を開けた。なかはひっそりとしていて、人の気配がなかった。むしろ落ち着いて本を見れそうなので良かった。

で、入口からつらつらと背表紙を眺めていく。

するとすぐにおかしなことに気づいた。

『死神』『死神の精度』などタイトルに死神とついているものが多い。漫画もあるなど見てみたら『デスノート』でこれも死神の話だった。他に『死神くん』『死神監察官雷堂』なんていうものもある。

たまたまこの棚だけがそうなのかと思って横にずれていっても死神ばかり。おかしな古本屋もあったものだ。どういう意図でこんな本ばかり集めたのか気になった。よほど変わった店主なのか。

と思って奥の方をふりかえったら、すぐ後ろに人がいて驚いた。

それはわずかに残った髪が白い、細身の老人だった。

「いらっしゃい」とにっこりした。「何をおさがしかな」

「何をとって……」

「何をとって？」

「死神の本ばかり」

「その通り」と嬉しそうに言う。

「なんでまた」

「世間は死神のことをあまりよく知っていないと思ってね。死神の本を集めたわけですよ」

「売れるんですか？」

「あんまり」少し肩をすくめた。「でも、いいですよ。あんまり売れなくても。世の中に一軒ぐらいあってもいいでしょ。死神本専門店があっても」

「あってもいいかもしれないけど……」

「死神本を読むとなかなか面白いですよ。死の考察にもつながる」

「じゃあ、おすすめの本はどれなんですか」

「おすすめといえば全部なんだけど、しいていうとこちら」と奥の棚を指さした。

そこにいくとその本棚いっぱい『死神のすすめ 市仁上博士』という本がならべられていた

。

「死神のすすめ……」

「そう。なにをかくそう私が書いた本でね。出版したわけですよ」

「えっ、そうなんですか」

「でも、なかなか売れなくてね」

私はその本を手にとって見た。死神の由来、死神の歴史など目次にある。

「よかったらもって行っていいですよ」

「くれるんですか」

「買ってくれるなら、嬉しいけど」

「いや、それならいいです」

「じゃあ、あげますよ。本は読まれてなんぼ。読まれずに本屋に置かれていても仕方がない」

「じゃあ、もらっときます」と頭をさげて店をでた。

しかし、おかしい本屋もあったものだと思った。

私はそのあと予定通り、電車に乗って電器店街をぶらぶらして夜には家にもどった。寄り道したので市仁上堂書店の前を通らなかったの、家に帰ってカバンを開けてみて『死神のすすめ』がでてきて、そのときになって本のことを思い出した。

なにげに読み出して、読み進めた。死神についていろいろな知識が書かれているが、それを知っていたからといって、なにがどうなるというものではない気がした。

そんなことより、この本を書いたあの店主は変わっているとつくづく思う。

あまりにも変わっているの、あの店主こそ死神ではないかと思えてきた。仮にあの店主にこのことを言ったとしたら、どう反応するだろう。

普通の人なら死神と言われて、いやあな気になるだろうが、あの店主なら悪い気はしないかもしれない。

それと市仁上というのも死神の当て字ではないだろうか。死神堂書店としたら近所にいやがられるから市仁上とした。ついでにペンネームも市仁上博士とした。

よし、また時間があったらひやかしに行ってみよう。

それで数日後、市仁上書店のある通りに行ってみたのだが、その市仁上書店がないのだ。

はじめ通りを間違えたのかと思った。

しかし、間違えているはずがない。

そんなはずはないと、通りを行ったり来たりしているうちに近くに玄関先を掃除しているおばさんがいたので訊いてみる。

「あのう、すみませんが、あそこにあった市仁上堂書店という本屋はどうなったんですかね？」

おばさんはふりむいて「は？」という表情をする。

「あそこあたりにあった本屋」と指をさしてみる。

「本屋？ そんなものないよ」

「いやいや。たしかに数日前にはありましたよ」

おばさんは首をかしげた。「そんなもの見たことないよ。どこかと間違えてんじゃないの」

というと、おかしいこというね、という顔で玄関から入って行った。

とり残された私は、しばし茫然とした。

これはどういうことなのか。

あの市仁上堂書店は幻だったのか。

いやいや、そんなことはない。

げんに店主にもらった本は自宅にある。それがこの世に市仁上堂書店があったことを証明している。

私は不安になって自宅にもどり、本をみてみた。やはりその本はあったし、内容もかわらない。

これはどういうことなのか。

私はあの店主が死神ではないかと考えてみたが、こうなってみるとそれは本当のことなのではないかと思えてきた。

死神であることを見破られたために消えた。面とむかって言われ、嘘をつけないから消えた。死神が嘘をつけないというのもおかしいものだが、そんなものかもしれない。

まあ、こんなふうに考えても、実際どうなのかわからない。誰かにこのことを話してみても信じてもらえないだろう。

私の中にもやもやしたものが残ったが、普段の生活は変わらず、日常生活の中で、市仁上堂書店やあの店主のことなど忘れていった。『死神のすすめ』も他の本の山にうもれていった。

それでもふと市仁上堂書店のことを思い出し、見知らぬ通りにあの本屋があるのではないかのぞいたりしていた。

でも、そういう記憶は平凡な日常のなかにうもれいくものである。

ある日のことである。私は普段、道路をわたるときなどよく気をつけているつもりである。

その時はなぜか周りをよく見ずに道路をわたろうとした。いきなり強い衝撃を感じた。クルマに轢かれたのだとすぐわかった。私は大きくふっとばされた。だが、気はたしかだった。顔を上げると私を轢いたクルマが走り去っていくのが見えた。

私は起き上がった。不思議にどこも痛くはなかった。奇跡だった。私の体はゴムのように衝撃を吸収したかのようだった。私はいつのまにか不死身の体を持っていたのかもしれない。

私は何事もなかったかのように普段の生活にもどった。

それでふと思ったのが、この奇跡はあの市仁上堂書店が関係あるということなのではないかということだった。

そんなある日、私はいつものようになると見知らぬ通りに入って歩くことにしていたが、その甲斐あって、またあの市仁上堂書店を見つけた。

前にあった場所とは全然違うのにあの看板や店構えは同じ。まったくそのまま引っ越ししてきたかのような感じだった。

私はなかをのぞいた。以前見たまったく同じの雰囲気。なかに入ってみると、やはり死神本ばかり。ふと振り向くと、あの店主が立っていた。

「また来ましたね」と店主は微笑みながら言う。

いざ店主をまえにするとなんといい言葉がでてこなかった。

「待ちましたよ」

「待ちましたよ？」

「いつか来ると思いましてね」

「いつか来るって、前と場所が違うじゃないですか」

すると店主は鼻で笑った。「それで私に何か言うことがあるんじゃないですか」

そう言われて、何か言うことがあったなと思ったが、すぐ出てこなかった。

「そうそう。あの本を読まさせてもらいましたよ。ずいぶんと死神について勉強になりました」

「そうでしょう」と嬉しそうにならずいた。

「それですね。あまりにもくわしいんで、ひょっとするとあなたが本物の死神ではないかと……」

すると店主はまた鼻で笑って、にんまりした。「よくわかりましたね」

私はドキリとした。「じょ、冗談でしょ」

「冗談じゃないですよ。ちゃんとあなたを見込んで本をプレゼントしたわけですから」

「見込んで？ あなたが死神だと見破るということですか」

「いやいや。後継者になってくれないかということですよ」

「後継者？ 死神の？」

「そう。死神は誰でもなれるわけではありません。それなりにふさわしい者になるのです」

「ふさわしいって……。人間として生きているのに死神なんて……」

「まだ気づいてないようですね」

「気づいてない？」

「ついこないだ事故にあわれたでしょ」

「ええ、まあ」

「あの時、死んだんですよ。あなたは」

「ま、まさか」

「クルマにまともに当たられて無傷で生きながらえるはずがない」

私の頭の中は真っ白になって、何も考えられなかった。

店主は言う。「この店を引き継いでもらいたいのですよ」

それから、かれこれ一カ月くらいたっただろうか。

真実を受け入れるのに時間がかかったが、今は店主のもとめ通りに市仁上堂書店の新しい店主になったのだった。